



kaminorippo.org

付録8g:ナジル人と誓願の律法 — なぜ今日それらを守ることができないのか

このページは、エルサレムに神殿が存在していた時にのみ守ることが可能であった神の律法を探究するシリーズの一部です。

- [付録8a:神殿を必要とする神の律法](#)
- [付録8b:いけにえ — なぜ今日それを守ることができないのか](#)
- [付録8c:聖書の祭り — なぜ今日そのいずれも守ることができないのか](#)
- [付録8d:清めの律法 — なぜ神殿なしでは守ることができないのか](#)
- [付録8e:十分の一と初物 — なぜ今日それらを守ることができないのか](#)
- [付録8f:聖餐 — イエスの最後の晚餐は過越であった](#)
- [付録8g:ナジル人と誓願の律法 — なぜ今日それらを守ることができないのか](#)(現在のページ)。
- [付録8h:神殿に関わる部分的・象徴的な服従](#)
- [付録8i:十字架と神殿](#)

誓願(誓い)の律法、とりわけナジル人の誓願は、トーラーのある戒めが、神が確立された神殿制度にどれほど深く依存しているかを示しています。神殿、祭壇、レビ系祭司職が取り除かれた以上、これらの誓願は今日、完了させることができません。現代に見られる、これらの誓願——特にナジル人の誓願——を模倣したり「靈化」したりする試みは、服従ではなく発明です。律法は、誓願とは何か、どのように始まり、どのように終わり、どのように神の前で完了されねばならないかを定義しています。神殿なしに、トーラーのいかなる誓願も、神が命じられたとおりには果たせません。

誓願について律法が命じたこと

律法は誓願を絶対的に重いものとして扱います。人が神に誓願を立てるとき、その誓いは拘束力のある義務となり、約束したとおり正確に果たされなければなりません(民数記 30:1-2; 申命記 23:21-23)。神は、誓願

を遅らせること、また果たさないことは罪であると警告されました。しかし、誓願の成就是内面的・象徴的なものではなく、行動、供え物、そして神の聖所の関与を必要としました。

多くの誓願には、感謝のいけにえや自発の供え物が含まれました。すなわち、誓願は、神が選ばれた場所で、神の祭壇において果たされる必要があったのです(申命記 12:5-7; 申命記 12:11)。祭壇がなければ、いかなる誓願も完了へ導くことはできません。

ナジル人の誓願：神殿に依存する律法

ナジル人の誓願は、今日守れない戒めの最も明確な例です。なぜなら、その誓願に付随する外面的行為のいくつかは模倣できても、律法が定義する誓願そのものを、神の前で成立させ、完了させることができないからです。民数記6章はナジル人の誓願を詳細に記し、分離の外面的しるしと、誓願を神の前で有効なものとする要件とを明確に区別しています。

外面的しるしには次が含まれます。

- ぶどう酒およびすべてのぶどう製品から離れる(民数記 6:3-4)
- 頭にかみそりを当てず、髪を伸ばす(民数記 6:5)
- 死体の汚れを避ける(民数記 6:6-7)

しかし、これらの行為だけでは、ナジル人の誓願は成立も完了もしません。律法によれば、その誓願が完了し、神の前で受け入れられるのは、本人が聖所へ行き、必要とされる供え物を献げるときだけです。

- 全焼のいけにえ
- 罪のいけにえ
- 交わりのいけにえ
- 穀物の供え物と注ぎの供え物

これらのいけにえは、誓願の本質的な結びとして命じられていました(民数記 6:13-20)。これらがなければ、誓願は未完のままであり、無効です。さらに、偶発的な汚れが起きた場合、追加の供え物も求められました。つまり、神殿制度なしに、誓願は継続も再開始もできません(民数記 6:9-12)。

だからこそ、ナジル人の誓願は今日存在し得ません。人は外面的行為をまねることはできても、神が定義された誓願に入ることも、それを継続することも、完了することもできません。祭壇、祭司職、聖所がなければ、ナジル人の誓願は存在しません——あるのは人間の模倣だけです。

イスラエルがどのように従っていたか

ナジル人の誓願を立てた忠実なイスラエル人は、律法の初めから終わりまで従いました。誓願の日々の間は自分を分離し、汚れを避け、そして神が求められた供え物によって誓願を完了するため、聖所へ上りました。偶発的な汚れでさえ、誓願を「やり直す」ために特定の供え物を必要としました(民数記 6:9-12)。

村の会堂や私的な家、象徴的な儀式でナジル人の誓願を完了したイスラエル人は一人もいません。誓願は、神が選ばれた聖所で行われなければならなかったのです。

他の誓願も同様です。成就にはいけにえが必要であり、いけにえには神殿が必要でした。

なぜこれらの誓願は今日守れないのか

ナジル人の誓願——そして供え物を必要とするトーラーのあらゆる誓願——は、今日完了させることができません。なぜなら、神の祭壇がもはや存在しないからです。神殿はなく、祭司職は奉仕しておらず、聖所は不在です。これらがなければ、誓願の最終かつ本質的な行為は起こり得ません。

トーラーは、供え物なしに「靈的に」誓願を終えることを認めていません。現代の教師が象徴的な終結、代替の儀式、私的解釈を作り出すことも許しません。神は誓願の終わり方を定義し、そして服従の手段を取り除かれました。

このため：

- 今日、だれもトーラーに従ってナジル人の誓願を立てることはできません。
- 供え物を伴う誓願は、今日、果たすことができません。
- これらを象徴的に模倣しようとするいかなる試みも、服従ではありません。

これらの律法は永遠に残っています。しかし、神が神殿を回復されるまで、服従は不可能です。

イエスはこれらの律法を取り消されなかった

イエスは誓願の律法を一度も廃されませんでした。軽率な誓いの危険を警告されたことはあっても(マタイの福音書 5:33-37)、民数記や申命記に書かれている要件を一つたりとも取り除かれませんでした。弟子たちに、ナジル人の誓願は時代遅れだとも、誓願に聖所は不要だとも告げられませんでした。

パウロが髪を剃ったこと(使徒の働き 18:18)、またエルサレムで清めの費用に加わったこと(使徒の働き 21:23-24)は、イエスが誓願の律法を廃しておらず、神殿が破壊される以前には、イスラエル人がトーラーの要求どおりに誓願を果たし続けていたことを示しています。パウロは私的に、また会堂で何かを完了したではありません。律法が、誓願が結びへ至る場所を定義していたからこそ、彼はエルサレムへ、神殿へ、祭壇へ行ったのです。トーラーはナジル人の誓願が何であるかを定義しており、トーラーによれば、いかなる誓願も神の聖所での供え物なしに果たされ得ません。

象徴的服従は不服従である

いけにえ、祭り、十分の一、清めの律法と同様、神殿の撤去は、私たちにこれらの律法を尊ぶことを強制します——代替物を発明することによってではなく、服従が不可能なところで服従を主張しないことによってです。

今日、髪を伸ばす、ぶどう酒を断つ、葬儀を避けるといった行為でナジル人の誓願をまねても、それは服従ではありません。神が実際に与えられた戒めから切り離された象徴的行為です。聖所での供え物がなければ、その誓願は最初から無効です。

神は象徴的服従を受け入れられません。神を恐れる礼拝者は、神殿や祭壇の代用品を発明しません。神ご自身が置かれた限界を認めることによって、律法を尊びます。

守れるものは守り、守れないものは尊ぶ

ナジル人の誓願は聖なるものです。誓願一般も聖なるものです。これらの律法が廃止されたことは一度もなく、トーラーのどこにも、いつか象徴的実践や内的意図に置き換えられると示唆する箇所はありません。

しかし、神は神殿を取り除かれました。したがって：

- 私たちはナジル人の誓願を完了できません。
- 供え物を必要とする誓願を完了できません。
- 象徴的に果たしたふりをしないことによって、これらの律法を尊びます。

今日の服従とは、今も守れる戒めを守り、他の戒めについては、神が聖所を回復されるまで尊ぶことです。ナジル人の誓願は律法に書かれたまま残っていますが、祭壇が再び立つまで守ることはできません。